

卒論執筆を終えて－卒業生からの「教訓」集－(2006 年度版)

■石井周治

はじめに

卒論執筆において最も重要になるのは「テーマ選び」であると思います。卒論は己が大学生活で学んできたこと、考えてきたこと、志向してきたことをアウトプットする最大にして最高の機会です。だからこそテーマを真剣に選択すべきだというのも、僕が「テーマ選び」が重要であるとする理由の一つです。しかし単純にそのアウトプットが論文という形で残るというだけでなく、テーマは論文執筆における思考の深浅や意欲に大きく影響を及ぼすものです。卒論執筆を進めるに当たって、強い探究心やパソコンに向き合うモチベーションは不可欠です。したがって、自分が本当に書きたいこと、描き出したいこと、解き明かしたいことが何なのかを突き詰めて考え、己が全身全霊を以って向き合える事柄をテーマとして選択してください。

卒論執筆の実例

僕自身の卒論執筆動向を簡単にまとめます。

題目

「共生」の価値観－カウンターカルチャー的共同体の目指す生き方－（5 章構成）

執筆の流れ

- | | |
|---------|---|
| 4 年 5 月 | 題目決定（独論継承）。 |
| 6 月～8 月 | 放置（教育実習、夏期休暇満喫）。 |
| 9 月 | ゼミ合宿にて構想（妄想）発表。
（序章の原型完成、章構成作成）。 |
| | ゼミ合宿後、危機感を感じながらも放置（学祭没頭）。 |
| 10 月 | 学祭後、文献収集開始。 |
| 11 月 | 上旬に初稿（2 章まで）執筆、提出。
先生からは「全体的に書き直し後、再提出」とのコメント。
しかしながら「仮装」の活動多忙化のため放置。 |
| 12 月 | 上旬に「仮装」落選、卒論執筆に専念開始。
中旬に 2 章（書き直し）および 3 章を執筆、提出、先生との面談（方向性確認）。 |
| | 下旬（年末）までに 2・3 章更正、4 章執筆、提出。 |

- 1月 初旬、先生より返却。
4章までの改善点の指摘と結論に向けての方向性確認。
中旬、提出。

執筆当時の生活

【12月上旬】

- 11時～13時 起床、身支度および心支度
13時 登校（K棟PC室）
13時～18時 執筆
18時～20時 夕食
20時～5時 執筆
5時～11時 帰宅、睡眠

【12月下旬～1月】

- 10時 起床
10時～17時 執筆
17時～19時 夕食、一時帰宅
19時～4時 執筆
4時～10時 PC室にて椅子を並べて睡眠

反省および教訓とアドバイス

構想段階

- ・ テーマの決定を投げやりにすべからず
精神的に切羽詰りながら向き合うテーマです。安易に「これでいいかぁ。」と決めることなく、卒論執筆自体が自分の財産となるようしっかり考えて決定してください。独論段階でテーマを定められるのが理想ですが、学業、サークル、バイト、遊び、飲み会、引きこもりなど何かと多忙な学生生活ではなかなか自分の興味関心の核の部分と向き合うのは難しいかもしれません。そんなときは留学するなり、休学して旅行をするなりして自分を取り巻く環境を変えてみると自分の中の見えにくかった部分が浮き彫りになります。ぜひ頑張って「突き詰める」という行為を大切にしてください。
- ・ フィールドワークに行くべし
僕の場合、フィールドワークを行わず、文献やインターネットで得られる情報だけを元に執筆しましたが、それらの情報はあくまで著者の主観を反映したものであり、そうした情報を解釈しながら執筆する論文は2重の主観を通したものになってしまいます。こうした状況下では、独りよがりな論、あるいは説得力に欠ける論になってしまいがちだと感じる事が何度もありました。やはり自分の

目・耳・口・鼻・肌、そして足を駆使して研究対象の生の姿を見聞し、考察を膨らませることが大事であり、そうした考察を裏付ける一次資料や即活用可能な情報を収集するためにも、フィールドワークを行うべきだと思います。

- ・ 参考文献探しの際はあらゆる側面からアプローチすべし

論文執筆において参考文献は必要不可欠なものです。テーマによっては参考のできる文献を見つけるのが難しいこともあると思います。僕の場合がそうでした。図書館でも、ネット上でも「カウンターカルチャー」そのものに関する文献が乏しく、なかなか考察が進まないために苦労しました。そこで視野を広げ、「1960年代の世界情勢」や「青年文化」、「バックパッカーの旅行記」など関連のありそうな分野の文献に片っ端から当たった結果、論文を執筆できるだけの文献と出会うことができました。また様々な分野の文献に当たることで異なった観点の意見に接することができました。参考文献を探す際は、ぜひ「より多く」だけでなく「より広く」ということも意識してみてください。

- ・ 先生およびゼミ生仲間の脳みそを最大限に活用すべし

よりよい論文にするには客観的かつ多角的な視点が不可欠だと思います。自分独りで悶々と考えるのも大事な作業ですが、行き詰まったときや思考が空回りするときは先生や他のゼミ生に相談することをお勧めします。助言や提言をもらえるだけでなく、自分で要点や論点をまとめながら話をする中で頭の中が整理されます。周囲の人々の頭脳をうまく利用して、自分の頭を刺激しながら思考を深めましょう。

- ・ 構想段階で論文の流れを一通り構築すべし

構想は論文執筆の土台となるものです。この土台がしっかりしていないと記述する論はもとより、思考そのものがブレたり、何をどのように書き進めていいのかわからない「悩みの無限ループ」に陥ってしまいがちです。そうなることを防ぐためにも、章構成とその大まかな内容をよく練り、構想発表の場で構想自体をしっかり叩いてもらって丈夫で奥行きのある構想をつくり上げることが望ましいのではないのでしょうか。

執筆段階

- ・ まず体裁を整えるべし

体裁は論文の重要な評価項目だそうです。そして余白、行数、フォント、目次、注や参考文献の書き方など、あらゆる項目に関してシラバスの条件およびゼミ指定の規定通りに体裁を整える作業は、思いのほか時間がかかるものです。この作業を提出直前の焦燥感に満たされた状態で完璧にこなすには相当な集中力および精神力、そしてワードの知識が必要であるはずですが、よりよい論文を完成させるためにも、まずは「形から入る」ようにし、しっかりルックスを整えましょう。

- ・ とりあえず「手をつける」べし

当然ながら、卒論は書かないことには進みません。脳内活動がいくら活発でも、それが文字化されないことには文字通り「体を成さない」のです。躊躇してはいつまで経っても進みません。また構想段階でのアウトプット同様、論文執筆段階においても少しずつアウトプットすることで思考を整理することができます。さらに文字化し、可視化することによって先生から具体的なお指導をいただくことが可能になります。したがって手をつける勢いというものも大事なものであると思います。

- ・ 常に論の流れと結論を意識すべし

前述した通り、構想はとても重要です。そしてその構想に基づき、すべての章・項・節を結論に結び付けて考えながら執筆を行うことが大切です。そうすることで頭を整理して論点と目標を定めた思考が可能になると同時に、文自体を通して一貫した流れが生まれます。ただ、このことは構想に固執することを意味するものではありません。執筆を進めるうちに当初の構想では不十分であったり、論が逸れたりする場合は往々にして発生し得ます。そうした事態に気づき、軌道修正するためにも、執筆を進めながら常に論文全体の流れを確認し、結論への道のりに筋が通っているかということを念頭に置くようにしましょう。

- ・ こまめに保存すべし

パソコンは、真摯で頼りがいがある一方でとてもナイーブな代物です。いつ何時、機嫌を損ねるかかわかったものではありません。予期せぬフリーズ、突然の終了、データの消失など様々な不測の事態が起こり得ます。あるいは自分の不注意で保存媒体を紛失したり、故障させたりすることも十分考えられます。それらの事故によって心身疲労と睡眠不足の結晶である卒論データを失って涙を呑むことがないように、過剰なまでにこまめに保存するよう心がけてください。また保存先に関しても、Zドライブ、自宅PC、USB、active mailに添付送信など、数箇所保存し、リスクマネージメントをしておくことをお勧めします。

- ・ 注および参考文献の記載を後回しにすべからず

注や参考文献の記載は、その数が増えれば増えるほど面倒くさい作業になります。しかしその分、論文自体の奥行きが増すのも事実であると思います。その上、その作業は体裁を整える際にも重要な部分です。したがって漏れなく正確に記載することが重要であり、そのためにも、注をつける必要があるときや、新たな文献から引用したときはその都度こまめに記載するようにしましょう。後から引用部分を探そうとしたり、まとめて参考文献を記載したりしようとすると、思わぬ時間がかかったり、記載漏れが発生する可能性が高くなります。

- ・ 体調管理を心がけるべし

卒論執筆は身体と頭脳が資本の作業です。したがって、心・身・脳の状態を良好に保つに越したことはありません。しかしながら、執筆作業は精神的にも肉体的にも楽なものではありません。もちろん僕のようにひたすら身体に鞭打って執

筆するのも一つの手ではあり、その結果として体重軽減を見込めるのは事実ですが、如何せん、それは「不健康なダイエット」に他ならず、お薦めできるものではありません。ですので、「心にゆとりを、身体に栄養を」ということを念頭に置きながら、どうか時間に余裕を持って卒論に取り組んでください。

- ・ 集中できる時間と場所を確保すべし

卒論執筆を進めるためには一定のまとまった時間が必要です。思考と文字化のローテーションを連続的に繰り返していく必要があるからです。したがって、どこなら一番集中することができるのか、脳が活発化するのはどの時間帯なのか、K棟PC室はどの時間なら人が少なく静かなのか、誰と一緒にいると執筆が捗るのかなど、自分の身体のバイオリズムや、自身と空間の相性などをよく分析し、自分が最も集中できる環境を発見、確保するよう心がけるとよいと思います。

提出段階

- ・ 何度も集中して見直すべし

誤字脱字および語句の統一の確認は提出前に不可欠の作業です。しかも、読み流すことなく一字一句着実に確認する作業は、論文が長くなればなるほど集中力を要し、一度や二度の確認ですべての誤りを修正することは難しいことです。パート分けして部分ごとに区切ったり、一定の語句に焦点を定めて確認を行う他、友人に依頼して第三者の新鮮な目で確認をしてもらうなど、手を尽くして更正するようにしてください。本文だけでなく、表紙の題目、目次のページ数、注や参考文献の詳細部分なども抜かりなく。またその際、割り付け印刷や両面印刷の機能を利用してできる限り使用する紙の枚数を押さえたり、あえて片面印刷にして裏をメモ用紙として再利用するなどして、環境に配慮した行動を実践すると尚よいと思います。

- ・ 前日には印刷すべし

提出締め切り時間は天国と地獄を分ける境界線のようなものであり、この時間を過ぎると卒業は絶望的となります。そうならないためにも余裕を持った印刷を心がけましょう。自宅にプリンターがあり、それを利用するならまだしも、K棟PC室のプリンターは毎年不具合が発生し、卒論提出者が生存しているプリンターに殺到して修羅場と化します。またそうした状況下で、データやパソコンに突然故障が生じてパニックに陥る危険性もあります。そのような事態を回避し、「卒論提出完了」という歓喜の瞬間を余裕を持って迎えるためにも、提出日前日には印刷を完了させましょう。また、卒論は提出後保管され、後輩の目に触れる機会があるものなので、自分で高質の紙を用意したり、高性能のプリンターを持っている友人に依頼するなど、より美しい仕上がりを追求することを頭の片隅に置いておいてはいかがでしょうか。

- ・ 提出前夜はしっかり寝て祝賀会に備えるべし

卒論は提出によって終わるわけではありません。「お家に帰るまでが遠足です。」という言葉があるように、「祝賀会を終えるまでが卒論」なのです。そして祝賀会は自分自身の頑張りを自賛しながら、ゼミ仲間と提出の喜びを共有するとともに、先生から労いの言葉をかけていただける有難い場です。先生に感謝しつつ、喜びの場をゼミ生全員で分かち合うためにも、祝賀会には万全の態勢で臨むべきであり、そのためには提出前夜、もとい祝賀会前夜は睡眠時間を十分に取り、英気を養う必要があります。したがって、前日の夕方には最終的な更正を終え、印刷し、日付が変わるまでには床に就くことができるよう心がけましょう。

終わりに

以上のことが少しでも参考にしていただけるなら幸いです。満足のいく卒論を書き上げることができるよう頑張ってください。ちなみに、僕が考える執筆を進める上での理想的なペースは以下のものです。

- | | |
|---------|---|
| 3 年 | 独論にてテーマ概要確定、卒論の先行研究記述および先行研究と自身の思考に基づく結論の方向性の提示。 |
| 4 年 6 月 | 独論テーマ推敲、卒論テーマ確定 |
| 7 ～ 8 月 | 一ヶ月のフィールドワーク（他の一ヶ月は夏期休暇を全身全霊を以って満喫）。文献の見当付け。 |
| 9 月 | 文献収集および文献研究開始。執筆開始（先行研究の更正および事例研究の文字化）。 |
| 1 0 月 | 中旬に先行研究および事例研究までを文章化して提出。
下旬までに更正、再提出。分析および結論の方向性確認。 |
| 1 1 月 | 上旬に分析文章化、提出。
中旬からは分析の更正と結論文章化、提出。 |
| 1 2 月 | 上旬で更正し、中旬には再提出。
年内、推敲。 |
| 1 月 | 上旬、内容見直し確認、自主更正、体裁確認。
中旬、提出。 |

例年、卒論提出者が多いことと先生のお身体は一つしかないことを考慮すると全員がこのような進捗度で進めることは難しいでしょう。したがって、先生にかかる負担を軽減するためにも、もう少し前倒しにして取り掛かるとよいと思います。そうすれば年末年始は余裕を持って過ごせるのではないのでしょうか。関根先生のご指導は本当に丁寧です。僕自身、提出が遅くて先生にご迷惑をおかけしたので言いにくいのですが、家族交流の時間を削ってまで卒論指導に当たってくださる先生のご恩に報い、誠意を示すためにも、そして自分で納得できる卒論を書き上げるためにも、気合いを入れて卒論執筆に臨んでください。

■石原 江利子

卒論執筆スケジュール

◆私のスケジュール◆

- ～6月 就職活動
- 7・8月 アルバイト
- 9月 教育実習
- 10月～ ゼミ内で構想発表をし、卒論にとりかかる。
- 10月～11月はひたすら大学の図書館で借りた資料や国立図書館で入手した資料を読んだり、
NGOのイベントに行ったりしてました。
- 11月 学類内中間発表
- 12月 ひたすら執筆。
- 1月 結局ギリギリまで執筆。
- 1月16日 提出

◆理想的だと思うスケジュール◆

- 4月 論文執筆の計画を立てる
- 5月 文献を集める / 読む
- 6月 ↓
- 7月 先行研究をする / 方向性、論点を絞る
- 8月 書き始める
- 9月 ↓
- 10月 第一稿提出
- 11月 学類内中間発表 / 第二稿提出
- 12月 見直し
- 1月 予備
- 提出日 — 提出

4年の4月でも3年の春でもよいのですが、とにかく計画を立てたほうが良いと思います。4年の春から夏は、就職活動や教育実習や旅行などでいろいろと忙しいと思うので、早いうちに計画表を書いてみて、自分に残された時間の短さを認識した方がよいと思います。たとえ計画を立てても思い通りにはいかないもので、早めに書き終わるようなスケジュールで計画を立てた方がよいと思います。

自分のスケジュールについての反省点

- ・取り掛かるのが遅かった。

9月に教育実習に行くなら、夏休み中に少しでも卒論を進めておいた方がいいと先輩に言われたのですが、結局ほとんど手がつけられず、教育実習が終わった10月からやることになってしまいました…。

- ・先生に見せるのが遅かった。

12月上旬には全体を見せるはずだったのですが、なかなか終わらず、結局見せる事ができたのは途中までで、全体を見せる事はできませんでした…。自分自身でいつまでに終わらせるっていう締め切りを設けてもそれまでに終わらせることができずに延びていつまでもなので、実際の締め切りよりも一ヶ月は早い締め切りを設けておいた方がいいと思います。ゼミの仲間同士で締め切りを定めたりしてもいいですね。

アドバイス / やっておいた方がよいと思う事

- ・はじめに

とりあえず、書き始めるときに「ページ設定」で文字数とか合わせるといいと思います。あとで合わせたりするのは少し面倒なので、最初にやっておくと便利です。フォーマットに関しては関根先生のホームページの「執筆要綱」を参考して下さいね。

- ・論文執筆に関する本を読む。

「論文」を書くということに対してイメージが持てる人は読まなくてもよいかと思いますが、イメージが全然わからない人は、「論文を書くために」とか「卒論を書くために」と銘打った本をいくつか読んでみるといいと思います。卒論執筆の計画の立て方や文献の探し方などが紹介されていて、参考になると思います。関根先生の「論文執筆要綱」にも参考にできる本が載っていたと思うので見てみてください。

- ・とにかく人に見てもらおう。

私はあまり出来ませんでした…。全体が出来ていなくても、少し書いたらとにかく人に見てもらったほうがいいと思います。自分では論理的に書いているつもりでも、人が見たら「？」な事もよくあります！

- ・提出日

誤字脱字のチェックや、目次と中身のタイトルが合っているかの見直しなど、最終的な

チェックは意外と時間がかかります。また、提出日に印刷しようとすると思わぬコピー機のトラブルなどで焦ることになるので、前日には完璧にしておいた方がいいと思います。当日にコピーする場合も、時間には余裕を持って朝早くに印刷するようにして下さいね。あと、提出用のクリップも忘れずに持っていくようにして下さい。

・気分転換

私は大体、図書館のパソコンか家のパソコンで書いていました。K棟とか学情とか、みんなお気に入りの場所があるんじゃないでしょうかね。ずーっと同じ場所にこもると行き詰るので、私は定期的に場所を変えてましたよ。あと、私は4年の9月頃から宅通になったので、実は通学電車の中が一番集中できる場所でした。景色をぼーっと眺めながら考えると、いいアイデアが浮かんだりしました。つくばに住んでいると気分転換が難しいかと思いますが、卒論のことを全く考えない時間を意識的に作った方がいいと思います。

■上間結花

一卒論執筆を終えて

1. テーマを早めに決める

テーマを早く決めるにこしたことはないと思います。テーマに関する十分な文献、資料がないと、書くのに 苦労すると思うので、テーマが決まったら早めに参考文献を探した方がいいです。

2. 構想をしっかり練っておく

特に、問題設定は重要です！ここがしっかりしないと、論文を書いている間に自分が何を書きたいのかわからなくなってしまうので、構想をしっかり練ってから章構成までつなげるといいと思います。ゼミの仲間にアドバイスをもらうのも良し。

3. 読んだ資料の整理をしておく

文献の大事な箇所に付箋を貼るなり、情報をノートにまとめておくなりしておかないと、論文を執筆する時に混乱してしまいます。

4. 論文の書き方を研究しておく

卒論に取り掛かる前に（余裕がある間に）、論文の書き方を知っておいたほうがいいと思いました。

5. 余裕をもって卒論チェックをしてもらう

論文を少しでもいいものにするためにも、そして先生の負担を減らすためにも、早めに書いてチェックしてもらいましょう。

以上、とても基本的なことばかりですが、自分自身の反省を踏まえ、大切だと思うことを書きました。とにかく、「早め早めに、余裕をもって」やること。卒論に疲れたら外に出て日光浴でもしてください。

■水野奈津子

卒論執筆はゼミの最終目標であり、大学生活において最も重要な活動の一つです。

① 「卒論」とは何かを知る。

私は「卒論」というものがこんなにもたいへんで、でもしっかり取り組んだだけ跳ね返ってくるものであるということを知りませんでした（私だけ？）。これから卒論を書く皆さんは、卒論というものがどういうものかよく知って書くのがいいと思います。

まず、学類が保管している資料室に行って過去の卒論を読んでみましょう。それも優秀論文を読みましょう。自分と同じテーマの論文を読むことも感じがつかめていいのですが、それだけで納得してしまわないで評価の高いものを読んでおくことをお勧めします。

これはゼミに入って3年生くらいのときにやっておいていいです。

② 早めにテーマを絞る。

卒論のテーマを先生に発表するのが4年生の6月頃ですが、その時にはすでにやりたいテーマとそのために必要なプロセスまで考えられていることが理想です。特に4年生の夏休みの過ごし方ですが、フィールドワークに行きたい人は4年生の1学期の間はかなり具体的に書きたいことが決まっていたほうが良いでしょう。

また、4年生の1年間で卒論を仕上げるのはかなりたいへんですので、3年生のときに独立論文を書く段階から文献を読み込み、自分の書きたい分野における有名な著者やそれぞれの論についてまとめておきましょう。私はできなかったのですが、独立論文を卒論の第2章に使っていた人は、卒論でもいいものを書けていました。卒論を書くということは費やす時間に比例すると私は思うので、やはり第2章の先行研究の部分を4年生になってからやるのではなく、4年生の貴重な時間は第3章以降を練ったりして自分の論について思考を深める時間に使ったほうがよいです。

③ スケジュール管理

人にもよりますが、4年生になってあわてて時間をつくるのは想像以上にたいへんです。私たちは部活、サークル、バイトなど、大学生活においていろいろなことに時間を割いていますが、授業以外の時間に勉強するのが卒論です。とにかく卒論のための時間をつくることから始めましょう。卒論に取り組む時間は自分の時間ですので、どうしても優先度が低くなりがちですが、手帳に「卒論」と書き込んで他の予定を入れないくらいの覚悟が必要です。

④ やったらやった分だけいいものを書ける、やらなければ後悔する

短期間に集中して納得のいくいいものができる人もいます。でも卒論はちょっと性質が違って、費やした時間に比例して良し悪しが決まると思います。文献を読む、重要な部分を抜き出す、考える、文章を書く、書き直す、体裁を整える、などなどたくさんやることがあるので、レベルの低いものを書くのにさえ相当の時間と労力がかかります。大学生活の集大成を自分の納得いくものに仕上げられるよう、ぜひ頑張ってください。

■風巻真理子

知っている方が多いと思いますが、卒論執筆時に知っておくと便利なワードの機能などについて書きたいと思います。

●ショートカットキー

「Ctrl」＋「C」＝コピー

「Ctrl」＋「X」＝カット

「Ctrl」＋「V」＝ペースト

「Ctrl」＋「Z」＝一つ前の状態に戻す

「Ctrl」＋「Y」＝一つ先の状態に進める（やりなおし）

「Ctrl」＋「Enter」＝改ページ（←次の章に進む時に便利）

●置換

「Ctrl」＋「F」＝置換

卒論の仕上げ段階では、「ただし」と「但し」や「すなわち」と「即ち」、「ひとつ」と「一つ」といった表記ゆれを直さなければいけません。

この作業、地道に一つ一つ目で探して直すのは気が遠くなる作業、見落としもしかねません。

このとき、置換機能を使うと…、

例えば「ただし／但し」をひらがな表記に統一する場合、文中の全ての「但し」をクリック一つで「ただし」に置き換えることができます。

●複数選択

「Ctrl」を押しながらだと、離れている文字列を同時に選択することができます。

例えば一つ一つ手打ちしなければならない、注。一回一回右クリックしてフォントを小さくして、上付きにして…としていたら大変です。

書いているときはそのまま(1)、(2)…と大きなまま打っていき、仕上げの段階で「Ctrl」を押しながら(1)、(2)、(3)…と複数選択をし、右クリックでフォントの設定をすれば、一回の作業で全ての注を小さな上付きにすることができて便利です。

●表はパワポで

ワードでは複雑な表が作れないし、エクセルではワードの文書に貼り付ける時に、行の幅や高さが勝手に変更され、間の抜けたかんじになり綺麗な表が作れません。

そういう時はパワポで思い通りの表を作り、ワードに貼り付けるとうまくいきます。

●図表の貼り付け

パワポで作った表やエクセルで作ったグラフをワードに貼り付けてからその大きさを調整すると、形が変形してしまうことがあります。

それを防ぐためには、ワードに貼り付ける際に、画面うえの「編集」から「形式を選択して貼り付け」を選択、出てきたウィンドウで「図（拡張メタファイル）」や「ビットマップ」を選択して張り付けると、変形することなく思い通りの大きさに変えることができます。

●印刷は集約印刷で

これは、知っとくと便利！とかではないのですが。

ネットで仕入れた資料をプリントアウトしたり、書いた所まで印刷して読み直してみたりと、卒論執筆には大量の紙を使います。

先生や先輩に見てもらうものや、最後に提出するもの以外は、両面印刷はもちろん、集約印刷をして、少しでも紙資源を大切にしましょう。

集約印刷は印刷画面のオプションから設定できます。

ここからは文献を探す時に便利なものについて…

●google scholar(<http://scholar.google.com/>)

ネット上に落ちている論文を検索できます。

信用度はまちまちですが、まだ文献などが少ない最近の事象をテーマに扱っている人にと

ってはよい情報源になると思います。

シンクタンクのレポートなどはかなり使えると思います。市場調査の結果なども出てきます。

●googleの検索オプション

また、ノーマルなgoogleでも、googleトップページから「検索オプション」ページにとぶと、色々便利です。

特にファイルの形式を指定して検索をかけることができるので、PDFのみに検索をかければそれなりの文書が出てきます。

また、ページ最終更新日を「過去3ヶ月」「過去6ヶ月」「過去1年」と指定することができるので、更新が滞っていて死んでしまっているサイトを検索から外すことができます。

■木村聖

◆ 自分の経験をもとにした後輩へのアドバイス

- ・ お互い、他のゼミ生の研究テーマに関心を持つ

図書館などで、参考文献など、他のゼミ生に役立ちそうなものをみつけることがあると思うので、お互いに助け合って卒論に取り組むことをお勧めします。実際僕は、12月に入ってからゼミ生に紹介してもらった文献が非常に役に立ちました。

- ・ 自分が本当にやりたいと思うことをテーマにする

卒論を執筆していくうえで全てのベースとなるのは、本人のモチベーションだということを、今更ながら痛感しています。それを長期間維持するのは意外と難しいものだと思います。学問的トレンドやテーマの発展性にとらわれず、自分が大学4年間の集大成として満足できるものをテーマにすると良いのではないのでしょうか。

◆ 「卒論執筆スケジュール（理想）」

- ・ 題目届を提出する（6月末）までに…

ー卒論の「構想」を関根先生に提出する

ここでいう「構想」とは、主要参考文献には既に目を通しており、題目・キーワード・章構成など、実現可能性の高い状態にあるのがベストではないのでしょうか。もちろん、問題意識・問題設定や研究方法は第1章にあたるわけですから、卒論との闘いは1学期から始まっているのです！！

- ・ 題目変更届を提出する（10月初旬）までに…

ーゼミでの中間発表のレジュメを関根先生に提出する

中間発表の日程は個人でバラつきが出るのは当然ですが、卒論の提出日はみな同じです。

というわけで、発表が2学期後半にある人も、この頃までに（もっと早いほうが良いのかも）は「構想」を具体的なレジュメへと発展させておくべきではないでしょうか。この時点では、分析概念も定まっており、すぐにでも第1稿を書き始められるようになっているのが理想ですね。

- ・ 中間発表会（11月初旬）までに…

—第1稿を関根先生に提出する

これが一番重要かつ一番ハードルが高い関門ではないでしょうか。だからこそ、これから卒論との闘いに挑もうとしているゼミ生には、強い決意のもと取り組んでほしいと思います。

■桜井貴之

I. 私の卒論記録

3年次	卒論でやりたいことを、なんとなくイメージ。 独論の内容も、その関連事項。
4年次6月初旬	第1回題目提出前、関根先生に相談。
7月初旬	タイ出発前、関根先生に相談（特に、フィールドワークに関して）。
7/11～9/8	タイ滞在。 滞在中に卒論のおおよその構想が固まる。
9月～	先行研究開始。 ゼミ発表（9月下旬）、中間発表（11月初旬）などを通して、題目、内容とも多少の変更。 ゼミ発表、題目変更のいずれにおいても事前に関根先生に相談。
11月上旬	執筆開始。 第1回提出（第1章と、第2章の一部）。
12月上旬～	第2章の残りを執筆。
12月中旬	第2回提出（第2章まで）。
12月下旬～	第3章の執筆。
1月初旬	第4章の執筆開始。 第3回提出（第3章までと、第4章の一部）
提出1週間前	第5章の執筆開始。（5章立ての構想だったが、この時になって6章立てに変更） 関根先生に相談。 早川さんに見ていただく（第4章までと、第5章の一部）

2～3日前 第6章（結論）の執筆開始。
前日 見直し

Ⅱ. 反省→アドバイス

<全体編>

早め早めの行動を

早くからテーマを決めていた割に、構想はなかなか固まらず、執筆に至ってはほとんど直前に始めた状態だった（提出当日や前日に慌てないだけの余裕を作ることはできたが）。事前に慌てないために、執筆の開始をもっと早めるべきだった。いや、それ以前に先行研究を秋から始め、タイでの調査のまとめも結局12月、1月までかかっていたので、全体として早めの行動が重要であるということを身をもって痛感した。フィールドワークから帰ってきてから本格的に先行研究を始めるというのは、本来順序が正しくないと思うので、どうか真似しないでいただきたい。。。

他者（読者）あってこそ論文

関根先生に本文を最後まで見せられないまま提出という形になってしまったが、それでも、僕はできる限り「誰かに見てもらう」ように努めた。提出1週間前、関根先生に本文を読んでいただくことは不能になったが、院生の早川さんに読んでいただくことができ、関根先生からもアドバイスはいただくことができた（そもそも「早め」の行動を取らなかったことがいけないので、先生や早川さんには大変ご迷惑をおかけしたことと思います…。論文という客観性が要求される文章を書くにあたっては、他者の目が非常に重要。大学の先生や院生だけでなく、ゼミ生や他の友人、フィールドワークでお世話になった方などに見てもらうのもよいと思う。僕はゼミで一度読み合わせの機会を開いたほか、他ゼミの友人からもアドバイスをもらった。

「卒論に集中するぞ」期間をどれだけ作れるか

早めの行動が大事だとわかっているけど、「行うは難し」というのが実情だと思う。4年次前半は多くの人が就活の時期であり、課外活動その他やりたい事も各自あろう。僕の場合、タイに行く前にろくに先行研究ができなかったのも、言い訳をすれば、6月下旬まで就活をしており、かつ僕自身が「一度に複数のことに集中できない不器用な(?)人間」である（ような気がする）ためだ。しかし、だからこそ「この時期は卒論に集中するぞ」というものをわりと明確に持てたのかもしれない。「タイでの頑張り次第で卒論の出来が決まる」という境遇も間違いなく大きく影響しただろう。現地では実際に自分にそう言い聞かせていた。とはいえ帰国後は、12月以降はさすがに卒論中心の生活だったものの、「中だるみ」の時期が続いたように思う。つくばマラソンのことで頭がいっぱいだったことに関し

ては全く悔いが残ってないが、それでも「卒論に集中するぞ」期間が足りなかったことは認めざるを得ない。

<先行研究編>

国立国会図書館

できる限り多くの先行研究や関連事項に触れるために、僕は国会図書館を何度も利用した。一度、関西に行く用事があった時には関西館にまで訪れてしまった（関西館ではあまり収穫がなかったが。）。さすが、日本一の蔵書を誇るだけあり、先行研究に大いに貢献した。ここでの複写代は尋常ではなく、交通費もかかるが、ここでしか手に入らない文献に関しては、「卒論のためなら」と出費を惜しまなかった。もともと、実は筑波大学中央図書館も国内第2位（？）の蔵書を誇り、決して侮れない。筑波大生の特権を有効活用しよう。

<フィールドワーク編>

いかに多くの情報を得られるか

僕のように、論文が生データの質・量の如何によって大きく左右されるケースでは、フィールドワーク先での情報収集が大きなカギを握る。とはいえ、思い通りにはいかないものだと最初から思っておいた方がよい。行きたい場所がたくさんあったし、得られた情報に関しても、後になって新たな疑問が沸いてくる。しかし、時間的制約、相手のスケジュール、交通アクセスなどがしばしば壁となって、現地でできることは限られている。幸い、僕の滞在先はホームページが充実、日本人スタッフがいるなど、環境に恵まれていたので、帰国後もかなりの情報を得ることができた。しかし、そうでないケースもあろう。

現地にいる間に、より多くの情報が得られるような状態を作ること大切である。例えば現地語の習得、そして信頼関係の構築である。僕はインタビューなどの際にタイ語の上手な日本人の助けを借りたが、彼らの時間を奪うことに対して申し訳ない思いと、「本来自分のことなのだから」という思いから、できる限りタイ語を覚えた（個々の山岳民族の言葉はほとんど覚えられなかったが）。小学校で担任の先生にインタビューをした際、最初は先生の表情が強張っていた（ように見えた）が、こちら側が訪問理由をきちんと伝え、また僕が自らタイ語でコミュニケーションをとると、相手の表情が緩み、積極的に応じてくれた（ように見えた）。この事例は気のせいかもしれないが、相手の母語を覚えること、相手に誠意を示すことで、相手との信頼関係が築けるというのは本当だと思った。

臨機応変に。でも、ある程度の計画を立てるのも大事

タイには約2ヶ月滞在した。けれども、卒論のおおよその構想を決め、かつインタビューなどの本格的な行動に出たのは、滞在も終盤を迎えた頃のことだった。今思えば、前半からもっと積極的に動いていれば、もっと多くの情報を得られていたと思う。

ただ、一方ではこれで正解だったと思う部分もある。主に滞在していた所は、全くの初

めのNGOだった（その周辺地域に行くのは2度目であったが）。現地に行って突然、「あれもしたいこれもしたい」と要求してばかりでは、現地の人との信頼関係を築けないと思う。実際、僕自身はボランティアとして受け入れていただいたので、当然そちらの仕事を優先させるべきであった。そもそも、その土地をよく知らないのだから「あれもしたい」と言っても行動のしようがない。

というわけで、前半は調査という調査をほとんどしていなかった。しかし、何もしていなかったわけではない。山岳民族の村に行くチャンスがあれば、暇な時間を利用して、ちやっかり村落内の観察をしたりしていた。あとは、タイ語である。タイ語を勉強したのは日常生活において必要に迫られたという理由もあるが、この時期にタイ語の習得のほうに神経を集中させていたことは、結果的に後半の時期のインタビューなどに大いに貢献した。滞在も1ヶ月を過ぎれば、調査地の様子がだいぶんわかり、NGOスタッフとも親しくなったので、色々とお話しやすくなった。実際、卒論の構想が現在のような形になったのはスタッフらのアドバイスがあったからこそといっても過言ではない。

とはいえ、やはり事前準備（語学、調査地の下調べなど）は多いに越したことはないと思う。僕は結果的にできる限り多くの情報を得られたが、滞在の終盤という時期だけに、内心あせっている自分がいた。それなりの計画や事前準備でもって臨み、現地ではあくせくせずに臨機応変に行動という形が望ましいと思う。

フィールドノート

フィールドノートの書き方は研究の分野や研究対象、調査地はもちろんのこと、研究者の好みによっても多少とも違うと思うのでマニュアルにこだわりすぎる必要はないが、メモや記録をとるという行為自体はとても重要だと思う。

以下、参考までに自分がしたこと、気をつけたことを挙げる。

- ・ 誰がその言葉を言っていたかを明記。
- ・ 日時や場所の明記も習慣づけた。
- ・ 数字のデータ（人口、年齢、戸数など）は貴重なので欠かさずメモ。
- ・ 形式を伴ったインタビューの際は、メモをとってもよいが最初に断る。
- ・ 何気ない会話の場合は、できる限り内容を記憶し、後でメモ。
- ・ その他、気づいたことは何でも、忘れないうちにメモする。
- ・ フィールドワークに関する本（方法論など）を1冊持参するとよい。

<執筆編>

体裁の整理は早めに

直前になって慌てないために、早め（本文を書き始める時とか）に体裁を整えておくとうい。特に注は、関根ゼミ方式の場合は修正に手間がかかるので、「最後にまとめて」ではなく、本文を書きながら平行してつけていくべき（修正の時にカッコ内の数字だけ変えれ

ばいい、という状態にしておけば後がだいぶ楽)。

複数のファイルに保存

僕はK棟、教育用計算機、自分のノートパソコン、USBメモリの4ヶ所に保存していた。一度、ファイルが重すぎたゆえに最新のデータ（inK棟、ノートパソコン、USBメモリの3ヶ所）が開けなくなってしまう、かろうじて教育用計算機内に最新ではないが最新に近いファイルがあったためダメージが軽くて済んだというトラブルがあった。複数のファイル（多いに越したことはない）に、かつ最新の状態で保存するとともに、容量にも気を配るべきだということに気づかされた。

■野崎隆人

教訓① 執筆は早く始める

- ・ 3年春休み、4年1学期：先行研究をあさり、1,2章辺りを書き始めよう
- ・ 夏休みまでには先行研究が自分の文章でまとまっていると良い（独論が使えると楽）
- ・ 学類の中間発表（10月末～11月初）までに第一稿を書き上げよう

※ 『『早め』じゃなくて『早く』】。

教訓② こまめに推敲する

一気に書いて後で推敲するタイプの人がいれば、常に推敲しながらノロノロ書き進むタイプもいると思う。私は極端な後者だが、どちらがいいとは言い切れない。自分にあったペースを見つけて欲しい。でも少なくとも、その日卒論を書き始める前に、前日書いた分を読み直すぐらいはした方がいい。論理の飛躍の防止に役立つ。また、時々全文を印刷して読み直してみると、少し客観的な視点で推敲できる。

教訓③ ワードを使いこなす

様々なショートカットキー、表、目次機能、など。